ひろしま復興・平和構築研究事業　報告書

広島の復興経験を生かすために

ー廃墟からの再生ー

第４巻

平成30年３月

国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会
（広島県・広島市）

発刊にあたって

本書は，広島県と広島市で構成する国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会が，平成25年度に取りまとめた『ひろしま復興・平和構築研究事業報告書　広島の復興経験を生かすために－廃墟からの再生－』の一層の充実を目的として，広島で学ぶ紛争終結国等からの研修生のニーズの高いテーマを取り上げ調査を行う補完研究の成果を報告書としてまとめたものである。

補完研究は平成27年度から継続して実施しており，平成29年度においては，広島の復興過程における「被爆体験の継承」と「海外からの支援」の２つのテーマを取り上げた。

「被爆体験の継承」については，広島の原爆投下から72年が過ぎ，高齢化によって，その経験を語ることのできる被爆者が減少してきた現実を見据え，被爆体験のうち，なにをいかに次世代に継承していくかという課題を扱ったものである。現在の国際社会では，武力紛争がもたらした街や市民への被害等をどのように客観的に後世に伝え，継承し，紛争当事者間の和解，そして将来の紛争予防に繋げていくかが移行期の課題として問われている。その意味において，被爆体験の継承という課題は，紛争後社会が復興へと向かう際に向き合うこととなる共通の課題解決へ向けた事例研究としての意味付けを有するものである。

「海外からの支援」については，武力紛争後の社会が復興に向けた歩みを進めるに際し，重要な役割を果たしうる国外からの支援について，特に，その支援の形を現代においてもとどめる，フロイド・シュモー氏の「広島の家」の取組を中心に検討したものである。紛争後社会の復興・平和構築へ向けた取組は，そこに生きる人々の生活の再建に向けた取組みであるとともに，紛争後社会そのものの国際社会への復帰という意味付けをも有する。本稿は，紛争後社会への海外からの支援が持ちうる，単なる物質的あるいは経済的欠乏への対処に留まらない重要性，国際的紐帯を通し復興・平和構築を成し遂げることの意味を指摘するものである。

本書が，広島で復興を学ぶ人々の関心に応え，紛争終結国における復興・平和構築の取組を後押しし，平和な国際社会の実現に向けた取組が一層促進されることを期待している。

最後に，執筆者の方々をはじめ，本研究にあたり貴重な助言や資料提供などに御協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げる。

平成30年３月

国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会

目　　次

ひろしま復興・平和構築研究事業

川野　徳幸　　被爆体験継承の課題：何を継承するのか
…… 1

落葉　裕信　　「広島の家」－国や人種を超えて寄せられた支援
…… 15

被爆体験継承の課題：何を継承するのか[1)]

川野　徳幸（かわの　のりゆき）

広島大学平和科学研究センター長・教授。広島大学原爆放射線医科学研所究附属国際放射線情報センター助手・助教，広島大学平和科学研究センター准教授等を経て，2013年６月から同センター教授，2017年４月，同センター長に就任。博士（医学）。専門は原爆・被ばく研究，平和学。

Luli van der DOES

広島大学平和科学研究センター外国人客員研究員，日本学術振興会外国人特別研究員。エジンバラ大学言語科学修士，ケンブリッジ大学応用言語学修士，シェフィールド大学社会科学博士。専門は多領域分析手法，社会心理言語学と言説分析。現在，戦争記憶，原爆体験の言説を研究中。

継承とは文字通り「受け継ぐ」ことである。ここ数十年，被爆体験継承の必要性は，切実に認識され，その重要性が声高に指摘される。しかしながら，何が継承できるのか，何を継承するのかといった問に対して，正面から議論したことはない。それは，原爆被爆被害[2)]が複合的でありすぎたことと同時に，「きのこ雲」の下でおこった地獄図の光景こそが，主たる被爆体験だという誤認に他ならない。もちろん，1945年８月６日と８月９日の「あの日」の地獄のような惨劇は，被爆体験あるいはその記憶の根幹であろう。しかしながら，原爆被害は，「あの日」だけの惨劇に留まらず，その後の原爆放射線に起因する原爆後障害とその原爆後障害に端を発した健康不安を含む心的影響・被害など多面的に捉えるべきであろう。その被害は，従来指摘されてきたように，人間生活の全面，つまり，健康面，社会・経済生活面，精神面にかかわるものだからだ。とすれば，これら側面の原爆被害にまつわる被爆体験の内，次世代の非体験者は，どの部分を継承し，さらに次世代に繋いでいくのか。また，被爆者運動の両輪の一つとも言われる「核なき世界」を標榜する被爆者の思い・願いなどは，如何に継承していくのか。どの側面の被爆体験は継承可能で，どの側面のそれはそうできないのか。継承できない体験は，ただ忘却に委ねるだけなのか。仮にそれを受け継ぐことは困難としても，忘却に抗う術はないのか。こういった本質的な疑問が本稿の出発点であり，根幹を成している。

本稿では，まず，行政ではいつ頃から被爆体験継承の重要性が議論されたのかを紐解いた上で，伝えるべき当の被爆者が継承に対してどう考えているのかを考察する。次に，そもそも被爆体験の根幹を成す原爆被害とは何かをあらためて考えたい。最後に，その原爆被害に基づく被爆体験の中で，次世代の非被爆者は何を継承するのか，何を継承しなければならないのか，同時に，そのために，私たち次世代はどういった取り組みをすべきなのか，という諸問題を検討したい。その際，現在実施されている行政，大学の取り組みを幾つか紹介し，被爆体験継承の可能性について若干の提言を試みたい。なお，本稿では，特に，広島での取り

組みを取り上げ，被爆体験継承の可能性を検討したい。

Ⅰ　いつから，被爆体験継承の重要性は語られたのか

ここであらためて指摘するまでもなく，被爆体験継承の重要性の背景には，被爆者の減少がある。昭和56年３月末（1981年３月末）に372,264人を数えた被爆者は，その後，減少傾向に転じ，平成29年３月末時点で164,621人にまで減少した。平成29年３月末での平均年齢も81.41歳である。

広島市行政がいつ頃から被爆体験継承の重要性を認識し，議論し始めたのか，を平和宣言を手掛かりに考えてみたい。2017年の平和宣言までで，「継承」という言葉が使われたのは過去10回である。以下に，過去10回の「継承」の用例を掲げる。なお，用例は，「継承」の前後文のみを抜粋した（下線は筆者）。

平和宣言における「継承」の用例[3]

1971　山田節男

・・・さらに，次の世代に戦争と平和の意義を正しく継承するための平和教育が，全世界に力をこめて推進されなければならない。これこそ，ヒロシマの惨禍を繰り返さないための絶対の道である。

1972　山田節男

・・・われわれ人類は平和で生存に適した地球を次の世代に継承するため，地球上に生きる運命共同体であることを深く認識し，思想の相違を乗りこえて，知的および精神的な連帯のもとに，人が人を殺し，人が人に殺されることのない新しい世界秩序を創造しなければならない。

1973　山田節男

・・・世界平和を培う源泉は，平和のための正しい，真しな教育であり，これこそが次の世代への「ヒロシマの心」の継承である。

1976　荒木武

・・・広島市長は，長崎市長とともに国連に赴き，被爆体験の事実を，生き証人として証言し，世界の国々に，これが正しく継承されるよう提言すると同時に・・・

1983　荒木武

国際連合は，第２回軍縮特別総会で採択した軍縮キャンペーンの一環として，今年秋の各国軍縮特別研究員の広島派遣，国連本部での原爆被災資料の常設展示など，被爆実相の普及と継承への新たな努力を始めた。

1987　荒木武

一方，未来を担う青少年への被爆体験の継承がますます重要となっている。

1988　荒木武

本日，ここ広島において，姉妹・友好都市の青年による「国際平和シンポジウム」を開催し，「ヒロシマの体験」を継承すべく，市民とともに討議する。

2000　秋葉忠利

21世紀には，何としてもこの悲願を達成しなくてはなりません。そのためにも

今一度，より大きな文脈で被爆体験の意味を整理し直し，その表現手段を確立し，人類全体の遺産として継承していかなくてはなりません。
2005　秋葉忠利
・・・核兵器廃絶と世界平和実現のため，ひたすら努力し続けた被爆者の志を受け継ぎ，私たち自身が果たすべき責任に目覚め，行動に移す決意をする，継承と目覚め，決意の刻でもあります。
2005　秋葉忠利
・・・今日から来年の８月９日までの369日を「継承と目覚め，決意の年」と位置付け，世界の多くの国，NGOや大多数の市民と共に，世界中の多くの都市で核兵器廃絶に向けた多様なキャンペーンを展開します。

最初に，被爆体験継承の重要性を指摘したのは，1976年の荒木武市長であった。それ以前の「継承」については，山田節男市長の「・・・戦争と平和の意義を正しく継承・・・」，「平和で生存に適した地球を次の世代に継承・・・」といった表現で，被爆体験そのものの継承を指摘したものではない。続けて，荒木市長は，1983年，1987年，1988年と立て続けに，被爆体験継承の重要性について言及している。平和宣言から推測すると，行政における被爆体験継承の重要性に関する言及は，1980年代から始まったと考えられる。また，平岡敬市長は，「語り継ぐ」という用語を使って，原爆・戦争の悲惨さを「語り継い」でいく必要性を説いている[4]。このように，平和宣言では，1980年代から被爆体験継承の重要性が指摘されはじめ，それ以降，継続的に被爆体験継承の重要性が述べられる。事実，その具現化のため，広島市は，長崎市と共同で，1983年にはニューヨーク国連本部で被爆資料，原爆写真パネル等の常設展示を開始した。その後，特に，1995年の被爆50周年を契機に，「被爆資料や被爆証言等の収集に努め，後世において利用しやすいよう整備を図るなど，ヒロシマの被爆体験を国内外の次の世代に継承する」取り組みを進め，現在では，広島平和記念資料館の管理運営をはじめ，修学旅行生への被爆証言講話等の実施，被爆体験伝承者の養成，被爆建物・被爆樹木等の保存・継承，国内外での原爆展の開催，原爆展・平和学習用資料の貸出・提供など多くの事業を積極的に展開している[5]。

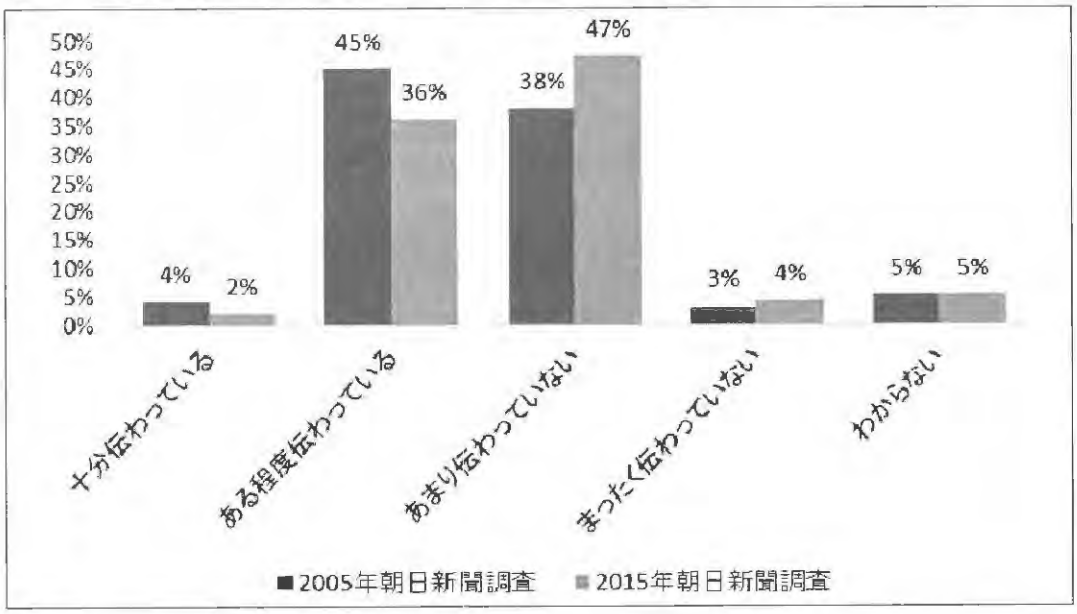
Ⅱ　被爆体験継承の難しさ

後述するが，被爆体験継承のための様々な事業が展開されながらも，被爆体験継承にはいくつもの困難がある。その困難さの最たるものは，端的に言えば，継承する側の次世代が非被爆者・非体験者であるということに尽きる。非体験者である次世代のわれわれが，体験者と同様に原爆被爆の実態を理解することは，いかように考えても困難であり，全ての被爆体験を継承することはできない。このことは，被爆体験の継承の過程で，失うものがあるということをも意味する。それ故に，被爆体験継承に関しては，如何にその喪失に抗うかが特に重要となる。

さて，そもそも継承する側の被爆者は，継承についてどう考えているのか。図１は，朝日新聞社が2005年と2015年に実施した被爆実態調査における継承に関す

る設問「被爆体験は次世代に伝わっていると思うか」に対する回答結果である[6]。2005年調査では，伝わっていると回答したものが約半数であったが，他方，10年後の同調査では，伝わっていないとする回答者が半数を超え，回答結果が逆転している。これは，現在，約半数の被爆者が被爆体験は次世代にあまり継承されていないと考えていることを示すとともに，被爆体験継承が，期待通り進んでいないと感じている実態を示している。

図１　設問「被爆体験は次世代に伝わっていると思うか」に対する回答結果の比較



また，同様の質問を設けた被爆者意識調査を2015年読売新聞が筆者所属の広島大学平和科学研究センターと共同で実施しているが[7]，設問項目「被爆体験が十分に継承されているか」に対して，「はい」が13%，「いいえ」が51%，「わからない」が31%であった。2010年同調査[8]では，「体験が引き継がれると思うか」という設問に対して，「そう思う」という回答者が61%であったことを勘案すれば，やはり多くの被爆者が期待通りに継承されていないと感じている実態が見えてくる。そこには，被爆の実相を伝えきれないという思いがあることは自明であろうが，それ以外では，「つらい」，「思い出したくない」，「理解してもらえるとは思えない」といった感情もある。2015年朝日新聞アンケート調査では，「なぜ伝えないのか」という設問に対し，「体験があいまいで思い出せない」が20%，「つらくて思い出したくない」が21%，「被爆体験を理解してもらえるとは思えない」が19%，「話す機会がなかった」が20%，「差別や偏見にさらされるのを恐れた」が14%であった。また，2015年読売新聞アンケート調査の「なぜ，子どもに伝えていないのか」という設問に対し，「尋ねられたことがない」が55%，「つらく，思い出したくない」が39%，「離れて暮らし，話す機会が少ない」が38%，「理解してもらえるとは思えない」が37%であった。

このように，伝えるべき当事者である被爆者にとって，被爆体験は，つらく，思い出したくないものであるとともに，非体験者に理解できるものではないとい

う思いもある。被爆証言などで多用される「筆舌に尽くしがたい」,「地獄」のような被爆体験であるが故に，語ること，伝えることを困難にしている。原爆被害が如何に重く深刻であるかをあらためて提示している。

被爆者には，伝えなければならないという思いがありながらも，それを阻む複雑な感情も同居する。しかしながら，被爆者は，その努力を継続する。少々古い数字であるが，広島で被爆体験の証言活動をする21団体が，昭和62年度から平成23年度までの25年間で，51,635件の被爆体験証言活動を行っている[9]。また，宇吹（1999：390）は，戦後50年間における「原爆手記」の掲載書誌数3,542件を確認し，その中への収録手記数は37,793件であったと報告している。被爆体験は確実に，着実に語られ，残されているのである。

同時に，多くの被爆者が「核なき世界」の実現を熱望し，被爆者団体は「核なき世界」をテーゼとする。また，標榜するばかりではなく,「核なき世界」というメッセージを発信し続ける。それは何故か。それは，三発目の原子爆弾が使われなかったのは，広島・長崎の悲惨な原爆体験があるからだと考える被爆者が多いことと関係があるのかもしれない。2010年朝日新聞アンケート調査における[10]「広島・長崎以降，核兵器が使われなかったのは，広島・長崎の原爆体験が世界に伝わったことと関係があると思うか」という設問に対し，66%が「そう思う」と回答している。また，同調査では,「原爆体験を語り伝えることは，核兵器を使わせない力になると考えるか」という質問も設けているが，76%が「そう思う」と回答した。つまり，被爆者の多くが，被爆者の存在そのものと原爆体験を世界に知らしめることが，核兵器使用の回避に寄与すると考えているのである[11]。

Ⅲ　何を継承するのか

非体験者である次世代のわれわれは，何を継承するのか。そのために，まずそもそも継承すべき被爆体験とは何かを考えたい。そこで，本稿では，被爆体験を三つの大きな領域に区分して考えたい。第一に,「あの日のこと」である。いわゆる1945年８月６日と９日の投下直後の脳裏から離れない地獄のような惨劇の実態，あるいはその記憶である。第二が,「その後のこと」である。原爆放射線に起因する原爆後障害に関連する体験である。第三が,「被爆者の思い・願い」である[12]。

事実，被爆者自身も次世代に伝えたいこととして，主にこの三領域の被爆体験を挙げている。2015年の朝日新聞アンケート調査では,「次世代に伝えたいことは何ですか」という質問を設けているが，次表に示すように，回答者の内，56%が「原爆投下直後の悲惨さ」を挙げている。つまり，投下直後の「あの日」の地獄のような情景を伝えたいと思っている。また，48%が「何十年も続く放射線障害の恐ろしさ」を挙げている。「その後」の原爆後障害を伝えたいと答える。また，55%は「平和の尊さ」を挙げる。これはいわば，被爆体験に基づく「核なき世界」の思想を中心とする平和への思いである。被爆者自身も伝えたい被爆体験をこの三つに集約していると言えよう。

表１　被爆者自身が次世代に伝えたいこと
（2015年朝日新聞アンケート調査より）

回答（複数回答）	頻度	三領域
原爆投下直後の悲惨さ	56%	「あの日のこと」
何十年も続く放射線障害の恐ろしさ	48%	「その後のこと」
平和の尊さ	55%	「願い・思い」
助け合うことの大切さ	16%	
健康のありがたさ	32%	
政治・軍を暴走させないこと	29%	
何事もあきらめないこと	9%	

１　「あの日のこと」

被爆者の被爆体験，あるいはその記憶の核にあるものは，被爆当時の「あの日」の悲惨な光景である。被爆証言・手記の中で，被爆者は繰り返し，「地獄」，「生き地獄」，「筆舌に尽くしがたい」といった単語を用い，「あの日のこと」を表現する。また，そういった記憶の核にある，「あの日」の「筆舌に尽くしがたい」光景を夢に見，思い出す。1985年の日本被団協調査で「あの日」のことを聞いているが，8,268名の証言の内，1,383名もの回答者が１回以上「地獄」[13] という単語を使って，「あの日」の光景を語る。次に，ごく一部，「地獄」の用例を抜粋する。

1985年日本被団協アンケート調査における「地獄」の用例

に追いやった様子は本当に	地獄であった。／○比治山の麓には，	男
残虐，無惨此のような阿鼻	地獄が二度とあって，ほしくない。原	男
／涙かれ見渡すこの世の	地獄絵図／　幽鬼と化せし人のさまよ	男
程です。／　一言でいうと	地獄であった。／　目も満足にあいて	男
の人達は全員死にました。	地獄でした。／　防空ごうより出た時	男
死にそうな人，皆此の世の	地獄です。あまり思い出したくありま	女
な死んで行った。まさに生	地獄であった。／○原爆ドーム付近の	男
。瓦れきの山。一瞬の中に	地獄絵図となった広島市街。放射能の	女
もない実態で此の世の生き	地獄を見ました。私も支那事変に従軍	男
鼻叫喚の情景と化し，生き	地獄の状況を呈した。このような行為	男
げられなかったこと等。生	地獄の様は今でも忘れることは出来ま	女
いた時，数分経過してから	地獄図を見て呆然としてしまった。	男
司令部の凱旋記念館の中は	地獄そのものでした。薬もなく，苦し	男
泣き叫びさまよい，まるで	地獄絵図でも見る如きものでした。し	男
さい時に絵本に出ていた「	地獄の絵」そっくりの，頭毛を振り乱	女
の内に死，死，死。ああ，	地獄絵とは我等兵隊はなすすべもなく	男
たか。／　まわりがすべて	地獄のようだったから，自分が生きて	男
ことではない。本当の生き	地獄をみたような印象。／　ウなど，	女

2 「その後のこと」

原子爆弾は通常兵器と決定的に異なる。その際たる理由の一つが晩発性の放射線障害，いわゆる原爆後障害である。晩発性放射線障害とは，放射線被爆後，急性障害から回復した後，数年から数十年といった長い潜伏期の後に影響が発症することである。また，症状が発症しないような低線率で長年にわたって被爆し，あるいは低線量を繰り返し被爆した後にも，ある期間を経て影響が出現することがある。原爆放射線による発生率の増加が認められる疾患として，白血病，甲状腺癌，乳癌，肺癌，胃癌，結腸癌，多発性骨髄腫，白内障，染色体異常，体細胞突然変異，胎内被爆者の知能遅滞（原爆小頭症）などがよく知られている[14]。同時に，長年の疫学調査によってそれらの発症リスクが明らかになっている。たとえば，1グレイの原爆放射線を被爆した場合（広島原爆で爆心地から約1.3キロでの被爆），白血病による死亡の推定相対危険度は4.92で，非被爆者に比べ約5倍も高い。その他の固形がんも1点数倍から約2倍という高リスクである[15]。近年でも「前白血病状態」としても知られる骨髄異形性症候群（MDS）が，被爆者の中で近年増加する血液異常として注目され，その分子発症メカニズムの研究が進められている[16]。原爆被害の最たる特徴はまさにこの晩発性障害である。同時に，被爆者は，いつ発症するともしれない晩発性障害への不安を抱えて生きていかなければならないのである。

この健康への不安は，継続する原爆被害として特質すべきであるし，「その後」の被害の顕著な特徴と位置付けられる。原爆被害の深刻さはここにも提示されている。1985年日本被団協調査では，71%が健康・生活・子や孫への不安を挙げ（伊藤 1988：61-62），2005年朝日新聞アンケート調査では，48%（4,856名）が「いつも不安を感じる」，46%（4,638名）が「ときどき感じる」と回答し，全回答者の90%以上が健康不安を感じている実態が明らかになった（川野　2010a：26）。もちろん，非被爆者である一般の高齢者もその多くが健康不安を抱えているであろう。しかし，少なくとも放射線被爆に起因する疾患が発症するのではないかという不安は抱いていないであろう。事実，2015年朝日新聞アンケート調査において，回答者の55%（3193人）が「健康状態が悪くなると放射線の影響だと不安になる」と回答した。被爆者自身の健康不安に加え，子・孫の健康不安を心配する被爆者も多い。2005年朝日新聞アンケート調査では，「出産や，子や孫の健康に不安を感じたことがあるか」との質問を設けているが，58%の回答者が不安を感じたことがあると回答した。最近の2015年朝日新聞アンケート調査でも，「自分の被爆の影響で，子や孫の健康に不安を感じますか」という質問に対し，47%が「はい」と回答した。2015年読売新聞アンケート調査では，「子や孫の健康に関して，あなたの被爆の影響が気になることがありますか」との設問に対して，約56%が「ある」と回答した。このように，被爆者は，自身の健康不安に加え，子や孫の健康に対しても不安を感じている。こういった被爆に起因する心的な影響も原爆被害の「その後」の特徴の一つとして理解しておきたい。

原爆・被爆に起因する心的な影響・負荷を示す事例は他にもある。被爆者は，被爆体験を夢で見たり，日常の中で思い出したりするのである。2005年実施の朝

日新聞アンケート調査の「被爆体験を夢で見るか」という設問に対し，「よくある」と回答した者が9.5%，「ときどきある」と回答した者が45%であり，55%が被爆体験を夢で見ることがあると回答した。また，同調査における「被爆体験を日常生活の中で思い出すことがあるか」という設問に対しては，「よくある」または「ときどきある」とした回答頻度が，76%であった。その後の2015年の読売新聞アンケート調査でも同様の質問をしているが，74%が「よくある」・「ときどきある」と回答している。なお，回答者は，2005年朝日新聞アンケート調査においては，被爆体験を現在に思い出させ，連想させるものとして，フラッシュ（原爆の閃光），祭りの人波（被爆者が郊外に逃げるとき線路に沿って歩いていた情景），スマトラ沖津波跡（がれきの中，何日も母を捜したこと），キュウリの輪切り（やけどした人が張っていた），焼いたスルメ（死体を焼いていた臭い）などを挙げていた。2015年読売新聞アンケート調査においては，どのような時に思いだすかという問いに対し，「海外の紛争や原爆報道などのニュースを見た時」が62%で最多で，「強い光・炎などを見た時」の22%，「夢で見た時」16%がそれに続いた。

「その後」の原爆被害には，こういった心的な影響のみならず，社会的被害も含まれる。たとえば，被爆者に対する偏見・差別の問題である。2005年朝日新聞アンケート調査では，偏見・差別について聞いているが，回答者の約20%にあたる2,674名が，被爆者であるが故の差別・偏見を受けたことがあると回答した。その内，1,966人（74%）が結婚時の差別・偏見を挙げていた。また，2015年読売新聞アンケート調査においても同様の質問をしているが，「過去にあった」とする回答が約28%，「現在もある」とする回答が4.5%であった。このように，「その後」の原爆被害には，原爆後障害のみならず，それに起因する健康不安等の心的影響，同時に，被爆者であるが故の社会的な被害も含まれるのである。

3 「思い・願い」

被爆者は，いわゆる「空白の10年」[17]を経て，頑なに「核なき世界」を標榜し続け，同時に，それを被爆者の切なるメッセージとして，日本国内外に発してきた。「空白の10年」以降60年以上，揺らぎもなく，同じメッセージを発信し続けるその原動力は，自身の悲惨な被爆体験に基づく，「No More Hiroshima」，「No More Nagasaki」，「No More Hibakusha」という強い願いであるのかもしれない。よく指摘されるように被爆者運動の両輪の一輪は，「核兵器廃絶運動」であり，その実現のために，国際活動，国会請願署名活動，抗議運動等の様々な運動を積極的に展開してきた[18]。2005年朝日新聞アンケート調査における自由記述回答（証言）6,782点もそれを雄弁に物語る。そこには，「世界」，「平和」，「核兵器」，「核」という単語が高頻度に出現する。「核（兵器）廃絶」による「世界の平和」が，被爆者のメッセージ，そして思い・願いの核心的部分であることを示している[19]。被爆体験を経て，核兵器のない世界平和を標榜し，核廃絶の言説をリードする被爆者のメッセージがここに凝縮されている。「核兵器」・「核」，「世界（の）平和」に関する用例を次に示す。

朝日新聞「被爆60年アンケート」自由記述における「核」・「核兵器」の用例

可哀想でなりません。世界中の人が　核をなくし戦争を止めて，同じ皆人間だから
た者の不安感など考えますと決して　核などを使って尊い命を奪う事は許されませ
も早くなくなる事を願っています。　核戦争があれば人類は滅亡します。次世代の
なく絶対悪であることを訴えたい。　核廃絶を人類として叫びたい
度と戦争は嫌です。すべての国から　核兵器のない平和な国で人々が暮せる様祈る

朝日新聞「被爆60年アンケート」自由記述における「世界（の）平和」の用例

忘れることはありません。ひたすら　世界の平和と福祉の日本の国を念願に生きて
くは何のため。人類の幸福のために　世界の平和のために「戦争を核を兵器を廃絶
球から核兵器をなくす運動を推進し　世界の平和を築いてもらう事を祈っています
を願っております。核兵器の廃絶と　世界の平和を心より祈ってます。被爆地と生
します。早く地球上に核兵器廃絶し　世界平和の訪れる事祈り私の言を述べました

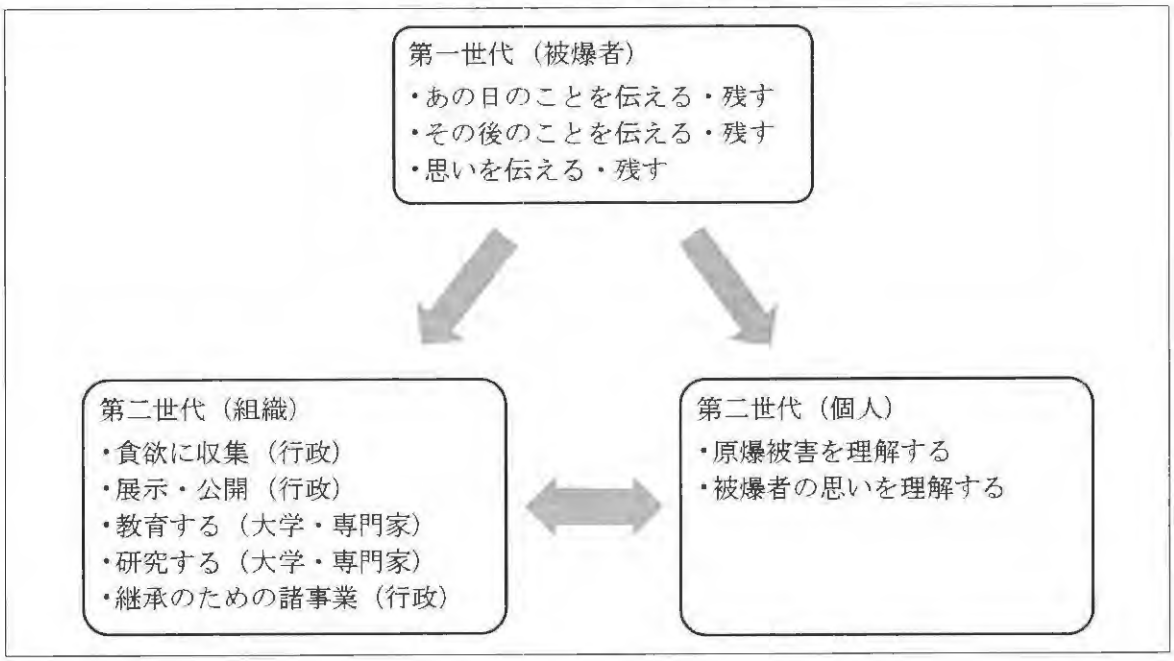
しかしながら，実はそればかりではなく，投下に対する恨み，つらみの感情，あるいは原爆投下の責任，投下に対する謝罪に対しても忸怩たる思いがある。詳しくは，川本・川野（2015）で論じたので[20]，ここでは繰り返さないが，原爆を投下した米国に憎しみもあるし，投下した米国に謝罪を求める気持ちもある。日米両国に対する投下の責任も追及したいと思っている。被爆者は，こういった恨み，投下の責任といった感情と共存しながらも，「核なき世界」という理想を掲げ，世界平和を標榜する。そういった複雑な感情がありながらも，それを乗り越え，あるいは共存しながら被爆者は，「世界平和」，「核なき世界」を訴え続ける。これをも含めて，被爆者の思いとして捉えたい。同時に，それをも理解し，次の世代に伝えていく責務が私たちにはあると思えてならない。

4　若干の提言

非体験者であるわれわれ次世代は，何を継承するのか。多分に，継承できないものもある。たとえば，「あの日のこと」は，如何に当事者に語られ，伝えられようとも，被爆者と同様の「あの日」の地獄のような情景を，臨場感をもって理解することは不可能である。とすれば，ありきたりのことであるが，「あの日のこと」に関しては，映像，写真，証言，手記から，想像力を駆使して理解するしかない。継承にとって，最も肝要なことは，第一義的に理解することに尽きる。「その後のこと」と「思い・願い」に関しても同様の指摘をせざるを得ない。

とすれば，如何に理解する取り組みを行うのかが肝要ということになる。また，取り組みということにおいては，個人と組織という二つのレベルがあると考えられる。一つの試みであるが，次の図は被爆体験継承に対する取り組みをまとめた略図である。第一世代である被爆者は，被爆体験，原爆放射線に起因する様々な健康障害，それに関連する心的影響，また，思いを語り，伝え，残すという作業に傾注いただく。組織としては，それら被爆証言・手記，被爆資試料等を貪欲に収集・整理（データベース化）・公開する。

図２　被爆体験継承の取り組み



先に触れたように，広島市・広島平和文化センターは，現在，被爆体験継承・伝承のために様々な事業を展開している。たとえば，「被爆体験伝承者養成事業」である。平成24年度に開始された本事業には，初年度，137名の応募があり[21]，現在，３年間の研修期間を経て，88名が被爆体験伝承者として活動している。その活動支援のために，広島市は平成29年度より予算化を図り，伝承者講話の定時開催事業を開始した[22]。これは，被爆体験継承者を育成するという意味以外にも，原爆被害の理解者を拡充するという意味において有益である。また，広島平和記念資料館が長年取り組んできた被爆資料，証言，遺影等の収集も重要であるし，同館の主目的の一つである原爆被爆の実相に関する展示・公開，また被爆体験講話，被爆体験伝承講話，ヒロシマ・ピース・ボランティア等の諸事業は今後も継続が望まれる。

被爆体験記・手記に関しては，特に，国立広島原爆死没者追悼平和祈念館が取り組んでいる。被爆体験記・遺影等の収集・データベース化を着実に進め，平成29年３月31日現在で，体験記に関しては135,747点を整理し，氏名・遺影に関しては，21,629点を収集している。それぞれ，順次，公開を行っている。その他，広島平和記念資料館が主に行っている修学旅行生などへの被爆証言活動，ヒロシマ・ピース・ボランティア，被爆者証言ビデオ制作（国立原爆死没者追悼平和祈念館との共同事業），あるいは，平和に関するデータベースの構築・公開など，被爆体験継承のための事業は多岐にわたる。それら全ての活動内容・具体例については，枚挙に遑がない。これら諸活動の継続は必要であるが，同時に，如何にこういった諸事業に多くの人がアクセスするかも重要な視点である。

広島平和文化センターの報告によると平成28年（2016年）の広島平和記念資料館への入館者数は過去最高の約174万人である。また，同年の国立広島原爆死没者追悼平和祈念館への入館者数も34万１千人を数える。しかしながら，同年の広島

市観光客総数が，対前年比で5.1%増加し，1,261万1千人である[23]ことと，同年の宮島来島者が約430万人であることに鑑みれば[24]，それら両機関への入館者数は，決して多いとは言えない。原爆ドームを見て，その後，平和記念公園一帯に足を運び，広島平和記念資料館，国立広島原爆死没者追悼平和祈念館，そして公園一帯に点在する様々なモニュメントを観光するという，いわば「平和観光」のための動線づくりも必要ではないかと考える[25]。

他方，研究者の役割も小さくない。「その後」の原爆後障害の解明に関しては，医科学分野を中心にこれまで貪欲に行われ，放射線被爆による発症リスクも明らかになってきた。また，研究の途上ではあるが，原爆放射線による発癌の分子生物学的発症メカニズムの研究も大きく進展した。被爆者の心的影響，社会的影響，あるいは思いに関しては，新聞各紙のアンケート結果などを援用し，筆者らを中心に取り組んでいる。これらの研究成果は，教育の場で発信するばかりではなく，公開市民講座のような場を作り，広く市民に向けて提供することが肝要である。

筆者らが所属する広島大学では，平成23年度より平和科目を設け[26]，全学選択必修化を開始した。これにより，すべての入学生約2500名はこの平和科目を履修することとなった。平成29年度には29科目の平和科目を開講した。この29科目の内，約7割に該当する20科目が，「原爆」，「被爆（放射線を含む）」，「核兵器」をテーマにする講義を一回以上盛り込んでいる。中には，被爆者を招聘し，体験を講話してもらう内容のものもある。広島県市の小中高で展開される原爆をテーマにした平和教育も重要であるし，このように大学といった高等教育機関でより専門的に，原爆被害について学ぶことも有益である。教育の場で，原爆被害をある程度理解し，その知識をもって，被爆者からの講話を聴き，証言・手記を読み，被爆資料を観察する。あるいは，証言を聞き，その後，原爆被害を学術的に学ぶ。そういったことにより，原爆被害への理解は確実に深化するはずである。こういった自明の作業を地道に行うことのみが，被爆体験継承を担保するであろう。

行政，大学がそれぞれにそれぞれの役割を十全に果たし，同時に，連携し，被爆体験に対する個人の理解度を深める「場」を提供する必要がある。その際，行政と大学の連携も重要である。広島平和文化センターと広島大学は，2016年12月に包括的連携協定を締結した。その協定の一環として，今後，市民向けの公開講座を行う予定である。原爆被爆に関する学術的研究成果と様々な被爆資料の提示・解題の組み合わせにより，原爆被害に対する理解は深化するはずである。冒頭述べたように，多くの被爆者が，被爆体験継承に対して，十分に継承されていないと考えている。投下当時の「あの日」の体験に加え，長期にわたる原爆後障害，それを起因とする健康不安，社会的な被害など複合的な原爆被害を理解するのは困難だという思いがあるからだ。そういった複合的かつ継続的な被害の全体像を，学術的に研究し，その成果を行政と連携しながら，如何に市民に提供するか，これも大学，行政に課せられた使命の一つであろう。

最後に，被爆体験に基づく，「核なき世界」への思いを重く受け止めることも継承には不可欠である点を指摘しておきたい。被爆者が被爆体験を継承されていな

いと感じることは，「空白の10年」を経て，これまで展開してきた「核なき世界」を軸とする平和運動が結実していないと感じていることと関係している。別稿（川本ら　2016）で議論したが，「核なき世界」の実現には半数以上の被爆者が懐疑的である。それが実現されない，あるいはそれが期待できない現状は，やはり被爆体験が十全に伝わっていないという思いと関連している。「核なき世界」を標榜する「ヒロシマ」はその担い手であった被爆者に頼ることが出来ない時代を迎える。今後，どのように「核なき世界」の実現に取り組んでいくのか，あるいは「平和」の聖地としてさらに大きな役割を担うのか。今後の「ヒロシマ」のあり方，役割をあらためて考え，それを明示することも被爆体験継承には不可欠な要素であるように思えてならない。

1）本稿は，次の二つの国際シンポジウムでの報告内容を基に，大幅に加筆・修正を行ったものである。
①川野徳幸，継承の課題：何が継承できるのか，何を継承するのか，国際シンポジウム「原爆体験・戦争記憶の継承～託す平和遺産」（広島大学平和科学研究センター主催），広島大学東千田キャンパス，2017年８月２日。
②川野徳幸，原爆体験とは何か，ヒロシマとは何か：「平和観光」という視点から考える，国際シンポジウム「平和観光研究の可能性」（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院メディア・ツーリズム研究センター主催），北海道大学，2017年12月11日。

2）これ以降，単に「原爆被害」を用いるが，原爆被害の特徴の一つが原爆放射線被爆による晩発性障害であることを鑑みれば，原爆による被害は，正しくは「原爆被爆被害」とすべきであろう。

3）広島市ホームページより筆者作成。
http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1110537278566/（2018年１月26日アクセス）。

4）1993年，1994年，1995年，1996年の各年に，「継承」ではなく，「語り継ぐ」を使用している。たとえば，1993年の平和宣言では，「・・・若い世代へ歴史を通して原爆や戦争を語り継ぐ教育も充実されなくてはならない」と述べている。また，1982年には荒木市長が，ヒロシマの平和の心を語り継ぐ必要性があると指摘している。

5）詳しくは，広島市HPを参照。なお，これら諸事業の多くは，広島平和文化センターに委託し，実施している。
http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1110598417580/index.html（2018年２月１日アクセス）。なお，担当は，市民局国際平和推進部平和推進課被爆体験継承担当。

6）2005年調査は，朝日新聞が広島大学・長崎大学と共同で実施，回答者13,204人。調査結果の詳細は，2005年７月17日付朝刊。2015年調査の回答者は5,762人。調査結果の詳細は，2015年８月２日付朝刊。なお，筆者らは，特に2005年調査結果を用い，多くの論文を執筆している。川野徳幸の広島大学研究者総覧を参照。http://seeds.office. hiroshima-u.ac.jp/profile/ja.46e7692a7122dc23520e17560c007669.html。

7）回答者1,943人。調査結果の詳細は，2015年７月29日付朝刊。

8）広島大学平和科学研究センターと共同実施。回答者1,015人。調査結果の詳細は，2010年７月30日付朝刊。

9）広島平和文化センターによるまとめ。それによると，各証言の会に累計5,772,121名が参加している。しかしながら，証言者実人員は228名であり，限られた証言者が，語り部として活動する実態もここにある。なお，21団体には，広島平和文化センターも含む。

10）回答者1,006人。調査結果の詳細は，2010年７月29日付朝刊。
11）詳細は，川本ら（2016）に詳しい。
12）因みに，濱谷（2005）は，＜あの日＞，および＜それから＞の日々，被爆した人びとの心身に生起した苦しみを，＜心の傷＞，＜体の傷＞，＜不安＞という三つの被害領域（要因群）から捉えている。
13）「地ごく」，「じごく」，「ぢごく」，「ジゴク」を含む。
14）原爆被爆後，白血病では６～７年後，甲状腺癌では10年後，乳癌，肺癌では20年後，胃癌，結腸癌，骨髄腫では30年後に，それぞれ発症のピークを迎え，以後緩やかに減少していく。詳しくは，放射線被曝者医療国際協力推進協議会編などを参照。
15）放射線被曝者医療国際協力推進協議会編，24-34頁を参照。
16）代表的な研究チームとしては，東京薬科大学生命医科学科腫瘍医科学研究室原田浩徳教授らのグループがある。原田らのこれまでの研究成果及びMDSの分子発症機序については，Hironori Harada and Yuka Harada（2015）に詳しい。
17）坪井直広島県原爆被害者団体協議会理事長は，「空白の10年」を「何とか生き残った被爆者も，その後の十年（1945～1955年）は，行政による援護も焼け石に水で，一族，知人の援護もままならず，また相談相手としての本格的な組織もなく，ただただ耐えて，一日一日を精一杯生きる他はなかった」時代と表現する（広島県原爆被害者団体協議会編：発刊に寄せて）。
18）詳しくは，日本原水爆被害者団体協議会ホームページを参照。
http://www.ne.jp/asahi/hidankyo/nihon/（2018年１月26日アクセス）。
19）詳しくは拙稿（2010a）と拙稿（2010b）を参照。
20）たとえば，「原爆を投下した米国に憎しみを感じたことがありますか」という設問に対し，回答総数1,943人のうち，23％である446人が「憎んでいる」と答え，54％の1,050人が「かつて憎んでいたが，今は憎んでいない」と回答している。また，オバマ米国大統領訪問前であるが，2015年朝日新聞アンケート調査によると43％の回答者が，米国大統領は「広島・長崎を訪問し，謝罪すべき」と回答している。
21）その内訳は，被爆者15名（内，胎内被爆者２名），被爆二世50名，被爆三世４名，その他68名となっている。
22）平成29年度当初予算において359万１千円を計上。広島平和記念資料館にて，休館日を除く毎日開催。詳しくは，次のURLを参照。
http://hpmmuseum.jp/modules/info/index.php?action=PageView&page_id=148（2018年１月26日アクセス）。
23）広島市観光局発表。
http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1496238527600/files/kankokyaku.pdf（2018年１月26日アクセス）。
24）廿日市市発表。
https://www.city.hatsukaichi.hiroshima.jp/uploaded/attachment/20634.pdf（2018年１月26日アクセス）。
25）筆者らは，広島平和記念公園一帯の原爆ドーム，広島平和記念資料館などを見学し，いわば「平和」を学ぶ，感じることを「平和観光」と位置付け，その可能性を既述の北海道大学主催の国際シンポジウムで発表した。その内容については，今後，別稿にてまとめる予定である。
26）平和科目では，広島県・市が主導する「国際平和拠点ひろしま構想」事業の一環でまとめられた『広島の復興の歩み』を副読本として推奨している。

謝辞

広島市の被爆体験継承への取り組みについては，中川治昭・広島市役所市民局国際平和推進部平和推進課被爆体験継承担当課長に様々とご教示いただいた。記して感謝したい。

参考文献

伊東壮（1988），『原爆被爆者の半世紀』，岩波ブックレットNO. 166，岩波書店

宇吹暁（1999），『原爆手記掲載図書・雑誌総目録1945-1995』，日外アソシエーツ

川野徳幸（2010a），原爆被爆被害の概要，そして原爆被爆者の思い，日本平和学会編『平和研究』35号，19-38，早稲田大学出版部

川野徳幸（2010b），原爆被爆者は何を伝えたいのか　ー原爆被爆者の体験記・メッセージの計量解析を通してー，『長崎医学会雑誌』，85巻特集号，208-213

川本寛之・川野徳幸（2015），原爆被爆者の「思い」についての一考察ー憎しみと責任論の視点からー，『広島平和科学』37，57-68

川本寛之・Luli van der DOES・川野徳幸（2016），原爆被爆者は核兵器廃絶の可能性についてどう考えているのか，『広島平和科学』38，57-82

国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会（広島県・広島市）編（2015），『広島の復興の歩み』，国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会

濱谷正晴（2005），『原爆体験』，岩波書店

広島県原爆被害者団体協議会編（2009），『「空白の十年」被爆者の苦悩』，広島県原爆被害者団体協議会

放射線被曝者医療国際協力推進協議会編（1992），『原爆放射線の人体影響』，文光道

Hironori Harada and Yuka Harada (2015), Recent advances in myelodysplastic syndromes: Molecular pathogenesis and its implications for targeted therapies, *Cancer Sci.* 106, 329-336

「広島の家」－国や人種を超えて寄せられた支援

落葉　裕信（おちば　ひろのぶ）

広島平和記念資料館学芸課学芸員。昭和52（1977）年広島市生まれ。平成12（2000）年（公財）広島平和文化センターへ入職し，広島平和記念資料館学芸課に配属。広島平和記念資料館がこれまでに開催した「海外からの支援－被爆者の援助と込められた再建への願い」（平成19（2007）年），「廃虚にフィルムを回す－原爆被災記録映画の軌跡」（平成21（2009）年）などの企画展示に携わる。現在は広島平和記念資料館の常設展示のリニューアルを担当。

Ⅰ　はじめに

2012年（平成24年）11月１日，広島市中区江波二本松に「シュモーハウス」と名付けられた展示施設が開館した。「シュモーハウス」という名称は，被爆から４年後の1949年（昭和24年）に住まいを失った広島の人々のために住居を建てる「広島の家」の活動を始めたフロイド・シュモー氏に由来する。「シュモーハウス」は，その活動の中でコミュニティハウス（集会所）として建てられたものである。

原爆による破壊と終戦後の混乱の中，物資は不足し，市民は傷を抱え肉体的にも精神的にも苦しい生活を余儀なくされていた。連合国の原爆報道の規制により被害の実態は国内に広く知られることはなく，また他の都市も戦争の傷跡が深く，国内の援助は不足していた。広島市民自身が焼け跡から立ち上がり再建への道を地道に歩むしかない状況であった。そうした中，大きな支えとなったのは，海外から寄せられたさまざまな支援であった。

現在，広島に寄せられた支援を形としてとどめ，伝えるものは，ほんのわずかしかない。「シュモーハウス」は，そのわずかに残る一つである。

この報告では，フロイド・シュモー氏の「広島の家」の活動に焦点をあてる。これまで「広島の家」については，広島平和記念資料館の企画展示や「シュモーハウス」の展示の中で紹介してきた。また，長谷川寿美氏の論稿[1]や「シュモーに学ぶ会」が出版した書籍[2]で紹介されている。この報告では，それらの内容と重なる点もあるが，新たに確認できた資料も交え，海外から支援を寄せた人々は何を思い，広島でどのような活動を行ったのか伝えたいと思う。

Ⅱ　「広島の家」の構想

1　フロイド・シュモー氏
1949年

「広島の家」の活動を計画し，中心的な役割を担ったのがフロイド・シュモー氏である。シュモー氏は1895年（明治28年）９月21日にアメリカ・カンザス州に生まれた。家は農場を営んでおり，シュモー氏も子どもの頃から牛や馬の世話をしていた。また小さい時から争い，特に戦争を憎むように教えられてきた。成長し，ワシントン州シアトルのワシントン大学で森林学を学んだ。大学在学中に第一次世界大戦が勃発。戦災救援と復興のためにアメリカ・フレンズ奉仕団と共にフランスへ赴き，町を破壊された人々のために住宅を建設した。さらにドイツとポーランドへも救援活動のために赴いた。大学卒業後は，シアトルのマウント・レイニアの国立公園で公園保護官として８年間勤務した後，母校のワシントン大学の講師となり森林学を教えていた[3]。

1941年（昭和16年），日本との戦争が始まるとシュモー氏の生活は大きく変化する。アメリカの

西海岸とハワイの一部の地域に住む日系アメリカ人たちが強制的に立ち退きを命じられ，収容所生活を余儀なくされることになったのだ。ワシントン大学にも日系アメリカ人の学生たちが在籍していた。シュモー氏は対象となった学生たちを学業が続けられるよう，東海岸の学校へ転校させ，アメリカのこの政策に抗議して大学を辞め，収容所に収容された日系アメリカ人への支援活動を行っていた[4]。収容所に収容された人々は，わずかな荷物しか持つことを許されなかった。家は放置され，破壊され，略奪にあい，ひどい状態のものもあった。シュモー氏は仲間とともに，こうした日系アメリカ人の家を修理する活動も行っていた[5]。

そうした中，1945年（昭和20年）８月６日に広島へ原爆が投下される。原爆投下を知ったシュモー氏は大きな衝撃を受け，深く心を痛めた。当時の様子を「広島に原爆が投下された時，私は傷ついた者の一人だった。悲劇をこうむった都市から，約5,000マイル（約8,000km）離れた安全な自分のオフィスでその信じられない知らせを聞いたけれども，私は衝撃を受け，深く傷ついた[6]。」と記している。その後，シュモー氏はラジオを通じて雑誌『ニューヨーカー』に掲載されたジョン・ハーシー氏のルポルタージュ「ヒロシマ」を聞いた[7]。ハーシー氏は，雑誌『タイム』，『ニューヨーカー』の特派員として1946年（昭和21年）５月に広島を訪問。牧師，医師，主婦など異なった立場の６人を取材した。被爆体験や当時の救護活動が克明に記され，一般の人たちが無差別に犠牲となる原爆の恐ろしさを訴えた内容は，世界中に大きな反響を与えた。シュモー氏も「ヒロシマ」によって，被爆した一人一人の実態を知ったのだった。シュモー氏は，被爆した人々のために何かできることがないかと思い悩み，広島の人たちへ，アメリカ人として謝罪の気持ちや悲しみを伝えたいと考えた[8]。しかし，言葉だけでは，自分の気持ちは伝わらないと感じた。自分の思いを伝えるためには，何か行動する必要があると考えた。そして，自分自身が広島へ行き，自らの手で家をつくり，原爆で住まいを失った人たちのために提供することを決意した。そうすれば，広島の人たちが自分が作業を行う様子を見て，自分の気持ちを感じ取ってくれるだろうと[9]。

その思いは，広島で共に家を建てたルース・ジェンキンズ氏に活動の参加を呼びかけた手紙の中に記されている。

「これは，爆撃で焼け出された二百万の日本人家族のうちの一家族のための家というだけではなく，私たちの爆弾により日本の罪のない人々が苦しんだことを遺憾に思う多くのアメリカ人の気持ちの証しになるものだ。ヒロシマは私たちが犯した重大な犯罪を記憶しておくべき地であり，今回の戦争で最悪の攻撃を受けた街であるからこそ，この家をその地に建てたいのだ[10]。」

Ⅲ　計画の実現に向けて

1948年（昭和23年）になり，計画は実現に向けて動き始める。終戦直後からシュモー氏は救援活動を行うため，日本行きの許可を求めていたが，被爆から３年後の夏にようやく認められたのだ。個人での支援活動の許可は得ることができず，ララ（LARA）に加わり，日本を訪れることになった[11]。ララというのは，アジア救援公認団体の略称であり，アメリカのフレンズ奉仕団やプロテスタント，カトリックの宗教団体など十数団体が中心となり1946年から日本への援助活動を行っていた。アメリカやカナダ，アルゼンチンやペルーなどの国の個人やグループから寄付された食糧・衣類・医薬品など人々の生活を支えるさまざまな物資が，船で横浜港へ運ばれた。物資は海外の人たちと日本人から構成されるララ救援物資中央委員会と厚生省（現在の厚生労働省）が連携し，割り当てや配分を取り決め，各都道府県へ送付された[12]。原爆の被害を受けた広島・長崎は，東京や大阪の大都市と共に早急な配給を必要とする地域と考えられ，1946年のララによ

る活動の始まりから援助を受けた[13]。広島市内の本川小学校には，ララ物資として届けられた衣類を受け取って喜ぶ子どもたちの写真が所蔵されている。衣類は日本人向けに補正されることもあった。ララによる支援は，1952年（昭和27年）まで続き，その年の３月31日までに約１万6,000トン，総額400億円以上の物資が届けられ，１千数百万人以上が恩恵を受けたと言われている[14]。

2　トラックに積み込まれるララ物資
1947年

3　ララ物資を受け取って喜ぶ子どもたち
1947年ごろ　本川小学校

シュモー氏は，病院や孤児たちに食糧や衣類を届けた[15]。来日する時にはヘイファーズ救済委員会が行っていた支援に協力し，アメリカからヤギを連れて来ている[16]。1949年の終わりまでに，アメリカのヘイファーズ救済委員会はミルクの提供と増産，畜産の発展のために約2,000頭のヤギと70頭を超える牛を日本へ届けていた[17]。

シュモー氏は救援活動に従事するだけでなく，広島を訪問し，関係者に「広島の家」の計画について話した。その際，広島市長をはじめ関係者から協力を得ることができると感じた[18]。広島市長，広島県知事，占領軍当局が計画について協力を約束したと記された資料もある[19]。合わせて広島の状況も観察した。街は原爆により焼き尽くされ，市内の建物の90パーセント以上に被害が及び[20]，多くの人々が亡くなっていた。生き残った市民は焼け跡のトタンや廃材を集め自力でバラックを建てるしかなかった。1946年８月現在で市内の約３万7,000戸のうち約１万2,000戸がバラックという報告がある[21]。衣食住の問題のうち，住宅の不足は食と衣の問題が改善され始めた後も続いていた。シュモー氏が広島で住宅の建設を始める昭和24年度の市勢要覧には１万6,000戸の住居の不足が想定され，４月には，広島市主催による公開討論会で「住宅問題をどうするか」というテーマで議論が交わされた[22]。まさに住宅の提供は緊急を要する課題だったのである。シュモー氏は日本家屋を建てることは初めてとなるため，じっくりとその様式を観察している[23]。計画の実現に向けて，しっかりとした土台づくりを行っていた。

4　崩れた建物の一部を利用して造られたバラック
1945年11月４日　爆心地から1，320m
千田町一丁目

アメリカへ帰国したシュモー氏は，広島での家づくりに向けて準備を進める。まず資金集めである。募金を呼びかけた文書を見ると，4,000ドルを集めることを目標にしている。3,000ドルを日本で資材を購入するための資金，残りの1,000ドルはアメリカからの旅費と食費に充て，一度に全額集めるのではなく，今後４カ月で徐々に資金集めの運動を広げていくことを考えている。また文書には日本側でこの計画を支持する広島県知事や広島市長などの談話も掲載されていた[24]。シュモー氏とつながりの深い太平洋フレンズ奉仕団や日本フレンズ奉仕団の支援もあったが，資

金集めの計画はシュモー氏個人の役割が大きかった。毎年クリスマスカードを送る友人たちに広島で家を建設する目的を書いた手紙を送り，寄付を呼びかけることも行った[25]。最終的に当初の4,000ドルを超える4,300ドルがアメリカのほとんどの州とアラスカやハワイ（当時はアメリカの州に加わっていない），メキシコ，カナダ，フランス，プエルトリコ，中国，日本から集まった[26]。4,300ドルは，1949年当時の日本円では154万8,000円にあたる。労働者の平均給与が月額6,902円（1949年８月）という時代であった[27]。

実際に広島へ行き，家づくりを行うメンバーは，シュモー氏自身の他，エメリー・アンドリュース氏，デイジー・ティブズ氏，ルース・ジェンキンズ氏の３名を選んだ。３人とも，第二次世界大戦中，シュモー氏と共に日系アメリカ人の支援活動に携わっていた。アンドリュース氏は，ワシントン州シアトルの日本人バプティスト教会牧師であり，シュモー氏よりも１歳年上であった。シュモー氏は，戦争中，共に協力しあいながら活動を行ってきた同氏を信頼し，「広島の家」の計画を行う上で最初に頭に浮かんだ人物だった。アンドリュース氏が広島に赴くために必要な旅費と食費700ドルの募金も呼び掛けている[28]。アンドリュース氏は，シュモー氏が来日しなかった1951年には，活動のリーダー的な役割を担った。

5　アメリカからのメンバー
左からアンドリュース氏，ジェンキンズ氏，ティブズ氏，シュモー氏
1949年７月　ホノルル

ティブズ氏は，黒人の女性でアメリカ・サウスカロライナ州のハービンソン大学の教職員であった。シュモー氏から「広島の家」の活動への参加の呼びかけが記されたクリスマスカードを受け取り，「現実離れした途方もない計画のように思い，ためらいはありましたが，広島に行くことを承諾しました[29]。」と語っている。

ジェンキンズ氏は，赤髪で長身の女性でアメリカ・アリゾナ州の小学校の教師であった。ヨーロッパでのフレンズ奉仕団の支援活動に携わった経験もあった[30]。

日本へ入るためには占領軍からの許可が必要なため，シュモー氏はこの３人に対して，フレンズ奉仕団の日本での活動に協力して短期間滞在することや滞在期間を４カ月とするなど申請書の書き方を助言している[31]。申請の結果，アンドリュース氏の場合，1949年７月５日付で軍から宣教の目的で７月31日から９月30日の２カ月間，日本へ赴くことが許可された[32]。

現地での作業をスムーズに行うため，広島県・市とは何度か書簡を交わし，交渉を進めた。1949年４月５日付の広島県からシュモー氏に宛てた書簡では，県と市が支援の申し出に感謝し，計画実現のために協力することを伝えている。さらにこの計画が住宅の提供という物質的な援助だけでなくアメリカと日本の関係を再構築する点も理解していた[33]。計画が具体化していく中で，県と市から児童図書館の建設についての提案もあった。住宅を建設した場合，広島では１万人を超える人々が住宅を必要な状況であり，シュモー氏たちが建てた家に住むことができる人は，ほんのわずかとなるためであった[34]。これに対して６月30日付の濱井広島市長への書簡の中で，シュモー氏は広島で多くの人々が住宅を必要としていることを理解し，市の提案を受け入れることを伝えている。また，この書簡の中では，15坪の建物を建てることを計画し，引き戸に使用するガラスやくぎ，水道のための銅管，電気配線のための銅線などの資材は持参し，木材は広島で購入することが記されてあった。木材については到着後の手配では乾燥に時間が必要となることを聞き，建設スケジュールが厳しくなるため事前に発注してくれるよう求めていた。日本へ到着する

具体的な日付も伝えられた[35]。

シュモー氏たちの広島での活動が実現する日が近づきつつあった。

Ⅳ　広島での家づくり

1949年７月17日，４人が乗った客船「ジェネラル・ゴードン号」がサンフランシスコの港を出港した。日本へ向かい，広島で作業を行う様子は，アンドリュース氏の日記やシュモー氏がまとめた“Japan Journey”（邦訳『日本印象記』）に詳しい。船は途中，ハワイのホノルルに寄港し，７月31日に横浜港へ到着した。２週間の船旅であった。下船後，一行は戦後に呉市助役を務め，当時参議院議員であった高良とみ氏の案内で東京へ向かい，活動に参加する日本の社会人や学生のボランティアと合流する。日本人のボランティアは20歳前後の若者で６人が参加した。シュモー氏は1948年に日本を訪れた時に，日本の若い人たちに計画への参加を呼び掛けていたのだった[36]。

6　合流した日本人ボランティアと共に
1949年８月　神戸

シュモー氏の呼びかけに学生たちは，「広島の人の役に立ちたい[37]。」「広島の被爆者の方々にとってまず必要なのは住宅だと思い，シュモー氏の計画に感激しました[38]。」という思いから活動に参加することを決意する。アメリカ人だけでなく，日本人も家づくりに参加する。ここに家づくりのもう一つの重要な意味があった。シュモー氏は，国や人種を超え，多くの人たちが協力して家づくりを進めることにより，お互いを理解し合い，相手を思いやる心を育むことを考えていた。戦争中，対立する国同士が憎しみをあおり，原爆投下をはじめ凄惨な破壊が行われた。シュモー氏は，破壊を免れるために，新しい世界はどのような方法で構築すれば良いか考えた。そして，戦争で失われた互いを理解し，相手を思いやるという良心を再び築くことだと考えたのだった[39]。

また，同じ国籍を持つアメリカから来た４人の中には，黒人のティブズ氏がいた。現在も根強く残るが，当時のアメリカ社会は，人種の違いによる差別が大きな問題となっていた。シュモー氏がティブズ氏に送ったクリスマスカードには「原爆投下を申し訳なく思い，戦争に反対し平和を信じているアメリカ人がいることを示すために，人種や宗派を超えたアメリカ人のグループで広島に赴き住宅を建設するプロジェクトに参加してほしい[40]。」と書かれていた。さらに日本人の仏教徒が活動に参加し，宗教の違いもあった。

まさにこの家づくりは，国籍，人種，宗教の違う人たちが協力して構築するという平和な新しい世界を生み出す方法を世界中の人たちに伝えるものでもあった。

10人となった一行は，８月３日，広島へ向けて東京駅を出発。列車内は蒸し暑く非常に混雑していた。途中，神戸で一泊し，列車を乗り換え翌日の８月４日午後，広島駅へ到着した[41]。事前に広島県や市と交渉を行っていたこともあり，人々の関心も高かった。駅では広島県知事や広島市長の歓迎を受け，報道機関からの質問が相次いだ。この時シュモー氏が「平和運動は語ることではなく行うことだ。」と語ったと記事に掲載されている[42]。

到着後，一行は広島流川教会に向かった。教会はハーシー氏の「ヒロシマ」に登場する人物の１人，谷本清氏が牧師を務めていた。谷本氏は1948年からアメリカに渡り，各地で自身の被爆体

7　広島駅に到着した４人
1949年８月４日

験と平和の大切さを訴えていた。シュモー氏は1949年６月にアメリカで講演旅行中の谷本氏と初めて会い，「広島の家」の活動について助言を求めたことがあった。シュモー氏が募金を呼びかけた文書にも「広島の家」の活動に協力を惜しまないという谷本氏の談話が掲載されている。谷本氏は広島の地に世界平和の構築を研究する機関の設立を構想し，「ヒロシマ・ピース・センター」として実現させる。海外や日本の人たちと協力し，広島での支援活動に重要な役割を果たした。広島流川教会は，シュモー氏たちの宿泊先となった。

家づくりを始めるまで，広島市との交渉のためにしばらく時間があった。先に紹介した書簡のように，県や市としては当初児童図書館を建設してもらいたいという思いを持っていた。シュモー氏たちの到着前には，図書館を建てるという新聞報道も見られる[43]。しかし，図書館に収蔵する本がアメリカ軍から提供される予定であり，子どもたちが読むことができない英語で書かれている本と分かる[44]と，計画は立ち消えとなった。この時，広島市が断念した児童図書館建設は，３年後の1952年に海外移民からの援助を基に実現することになる。アメリカ・ロサンゼルスのカリフォルニア州在住の広島県人会から400万円の寄付金が届けられ，県人会からの要望で児童図書館の建設に充てられた[45]。

計画は，住宅の建設に戻った。そして皆実町に１戸につき18万円（500ドル）で建設中の市営住宅の敷地に木造平屋建ての二軒長屋２棟を建設し，市に寄贈することになった[46]。市議会の最終的な承認を得る時間が必要なため，シュモー氏たちは空いた時間を広島記念病院でのボランティア活動に充てた。朝７時から病院で働き[47]，入院している患者に対して，食事の配膳や入浴の介助，掃除，洗濯などを行った。病院に石けんや消毒剤，薬品が不足している現状から[48]乾燥ミルクやビタミン，結核の治療のために抗生物質であるストレプトマイシンも提供している[49]。患者たちにとって，ボランティアの人たちとの交流は心の支えにもなった。互いに言葉を交わし，患者が讃美歌を歌ったり，シュモー氏たちがスライドを上映することもあった。この年の活動が終了しても患者の容体を気にかけ手紙を交わし，クリスマスにはバスタオルやキャンディなどのプレゼントを贈った[50]。

8　広島記念病院でのボランティア
1949年８月

８月15日から家づくりは始まった。広島の人々も作業に加わり，小学校の教師や大学生など40名近い人々が活動のメンバーに名を連ねた[51]。シュモー氏は第一次世界大戦の時の支援活動でも家をつくり，大工仕事を行うことは慣れていたが，日本家屋を建てることは未経験だったため広島の大工を雇った。毎日，宿泊先の広島流川教会から徒歩で作業現場まで通い，真夏の暑い最中に毎週６日間（土曜日は半日）働いた。時には雨に打たれながら屋根をふき，資材不足に直面することもあった[52]。全員が大工仕事に慣れていたわけではなく，大工からのこぎりやかんなの使い方など基本的なことを教わり協力して作業を進めた[53]。特に日本家屋はくぎを使用せず，家の骨格を組むために木材にほぞとほぞを差し込むほぞ穴と呼ばれるものが必要であった。のみで木

材に何百というほぞ穴を掘った。当時の作業の様子について，ティブズ氏は「原爆による破壊で道具や設備などはほとんど残っていません。住宅建設のためには，レンガを作るところから手伝わなければなりませんでした。毎日宿泊先の広島流川教会から作業現場まで歩いて行ったり来たりしなければなりませんでした。とてもしんどい作業で屋根裏部屋に戻るころには疲れきっていました[54]。」と語り，学生ボランティアとして参加した安積仰也氏は「一番きつかったのは，材木運びでした。かなりの量を毎朝材木屋で買い，炎天下を建築現場までリヤカーに積んで行きました[55]。」と振り返っている。

9　大八車で荷物を運ぶ
1949年８月～９月

10　協力して木材を切る
1949年８月～９月

11　家の壁のためにわらと泥を混ぜる
1949年８月～９月

12　壁土を塗る
1949年８月～９月

大工仕事だけでなく，滞在中は自炊であったため，家事も行う必要があった。料理や洗い物，買い物など当番を決めて行った[56]。シュモー氏は，知人に宛てた手紙の中で大工仕事と家事に奮闘する日本人の女性ボランティアたちを称賛し，また家計簿を付け，料理のメニューを考え，買い物のリストをつくるティブズ氏を，今回の共同生活に適任だと伝えている[57]。

夜には，ミーティングが行われた。学生たちからシュモー氏へボランティアを行う意義を問いかけたり，ボランティアの大切さなどを話し合った[58]。

しかし，働いてばかりではない。作業が無い土曜日の午後や日曜日には，映画を見たり，海水浴や川へキャンプに出かけている[59]。

地元の人たちとの交流も深まった。ラジオや新聞が「広島の家」の活動について伝えたため，毎日のように人々が作業現場を訪れ手紙が届いた。広島の印刷会社は，子供向け雑誌のために「広島の家」の活動に焦点を当てることを企画し，小学校６年生の子供たちが作業現場を訪れた。子供たちは建設している家やアメリカのことについて尋ね，何人かの生徒たちが放課後に家づく

りを手伝うようになった。子どもたちは木材を積んだリヤカーを押したり[60]，庭園をつくるための土を運ぶ作業を行っている。

知人の夕食会に招待されたり，保育園の先生たちとすき焼き鍋を囲んだり，取材を受けた印刷会社の工場を見学することもあった。アンドリュース氏は夏休みの休暇を取っていた教師の代わりに広島流川教会で日曜学校での授業も担当している[61]。

13　質問をする子どもたち
1949年９月２日

14　子どもたちと雑誌を眺めるシュモー氏
1949年８月～９月

被爆地の実情も目の当たりにした。シュモー氏たちの広島到着から２日後は８月６日であった。シュモー氏たちも平和祭に参列した。来賓の人々があいさつを述べ，平和の鐘が打ち鳴らされる中で，シュモー氏は平和の基礎は，あらゆる国の人々が共に働き，互いの理解と善意を誓うことだという思いを強くした[62]。爆心地付近にも赴き，アンドリュース氏は一瞬で破壊と荒廃が起こったことに衝撃を受け，改めてアメリカの行いを恥じた。別の日には広島赤十字病院を訪問し，ケロイドのある患者たちに面会している[63]。

広島での支援活動に重要な役割を果たしたノーマン・カズンズ氏にも会った。カズンズ氏はアメリカの雑誌『土曜文学評論』の主筆を務め，シュモー氏たちと同時期に「ヒロシマ・ピース・センター」建設の準備状況などを視察するため，広島を訪れていた。市内の病院や児童養護施設を訪問し，その様子を『土曜文学評論』に掲載すると共に以前から知人と話していた精神養子の考えも発表した。精神養子とは，海外の市民が肉親を失った広島の子どもたちと法的ではない養子縁組を結び，養育資金を送付するというものであった。この考えは多くの読者から反響があり，最初の養育資金2,000ドル（当時72万円）が広島市長宛てに送付され，対象となった広島戦災児育成所の子どもたちへ届けられた。その後，他の施設や一般家庭に引き取られた子どもたちへ資金の送付は広がり，約500人の子どもたちが援助を受けたと言われている[64]。精神養子運動は，昭和26年度の市勢要覧に「広島の家」の活動と共に海外から寄せられる具体的な支援として紹介されており，1949年は広島に特徴的な２つの海外からの支援が始まった年でもあった[65]。

シュモー氏たちは，広島市役所のカズンズ氏を歓迎する昼食会に参加し，「ヒロシマ・ピース・センター」の起工式にも参加した。この起工式の様子は，８月の終わりにアメリカのNBCラジオで放送された。

９月に入り，時間と資金の面から住宅を２棟完成できるか心配することもあったが，住宅の建設は進み，計画通り完成した。完成した時点では，既に学生ボランティアの何人かは夏休みが終わり東京に戻り，アンドリュース氏とティブズ氏も許可された滞在期間が過ぎ，帰国の途についていた[66]。

完成した住宅は，６畳の和室が２間，台所，トイレという間取りであった。当初，シュモー氏は調理台や給湯設備，水洗トイレをつくることを考えていたが，当時の日本の習慣や生活環境を尊重し，広島市が設計した案を採用した。玄関に下駄箱を設置し，台所には窓側にレンガ造りのかまど，流し，食器棚が置かれ，床板を外すと米や野菜を貯蔵できるようになっていた。トイレは大と小の２つに分かれていた。和室には押入れがあり，部屋の１つには床の間が設けられ，２つの部屋の間はふすまで仕切られていた。道路に面した部屋に出窓，裏庭に面した部屋には縁側がつくられた。

15　完成した住宅

16　住宅の間取り

10月１日には住宅の寄贈式が行われた。寄贈式では濱井広島市長，シュモー氏のあいさつの他，シュモー氏に感謝状，原子焼の花びんなどの記念品が贈呈された。住宅は，広島市によって「シュモー住宅」という名称が予定されていたが，多くの人々の協力によって建てられたものであったため，シュモー氏の希望で「平和住宅」と変更された。住宅の敷地には，地元の庭師の手助けを受けて庭園も造られた。小さな池がつくられ，石のベンチ，石灯ろうが置かれた。灯ろうにはシュモー氏の想いを込め，日本語で「祈平和」，英語で「That There May Be Peace」と刻まれた。シュモー氏たちが建てた住宅には，3,800の家族が入居を申し込み，広島市が抽選で４家族を決定した。１カ月の家賃は700円（1.85ドル）であった。

17　平和の灯ろうを眺めるシュモー氏と濱井市長
1949年10月１日

18　広島市からの感謝状

計画通りに住宅を建てることができただけでなく，多くの友人も得た。シュモー氏は「広島の家」の活動のもう一つの重要な意義である理解と善意を生み出すという点でも成功したと感じた[67]。シュモー氏が，募金に応じた人たちへ宛てた文書では，日本の多くの人たちが感謝の念を

示し，濱井広島市長が「寄贈された家が広島市の歴史の中で最も形ある偉大なもののひとつ」として称賛していることが伝えられた。合わせて依然として広島には住宅が不足しており，物理的な支援だけでなく精神的な面でも支援が必要と考え，「広島の家」の活動を続けていくために再び協力を求めた[68]。

V　新しい試み

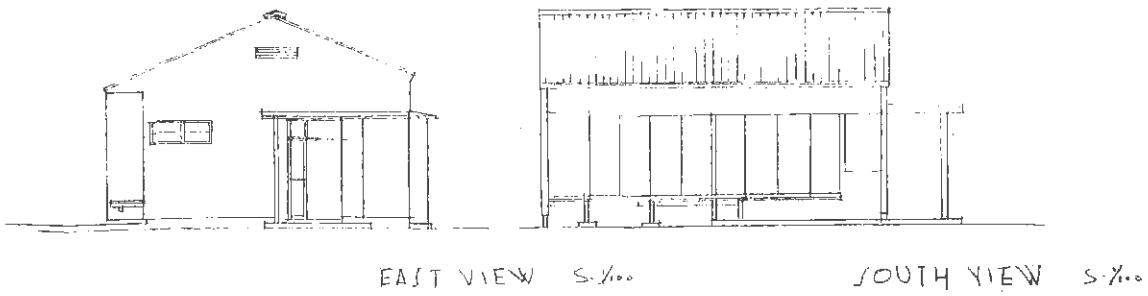
1　モデルハウス

翌1950年（昭和25年）の夏も再び，シュモー氏たちは広島を訪れた。前年よりも２カ月早く６月18日に広島へ到着。来日するメンバーは変わり，シアトルの職業学校教師の黒人女性マリタ・ジョンソン氏が活動に加わった[69]。日本人のボランティアの中には，２年続けて参加する人たちもいた。この年は，世界中の500人から１万ドル以上の募金が集まった。その中には日本へ向かう船内で，シュモー氏たちの考えに共感した日系人やフィリピン人，中国人から寄せられた募金も含まれていた[70]。広島へ到着した当初は住宅だけでなく，ボランティア活動を行っていた広島記念病院に新たな病棟を作る予定であった。しかし，病院を運営する側の計画がはっきりとしていなかったため，断念することになった[71]。前年に続いて広島記念病院でボランティア活動を行い，家づくりに取り掛かった[72]。

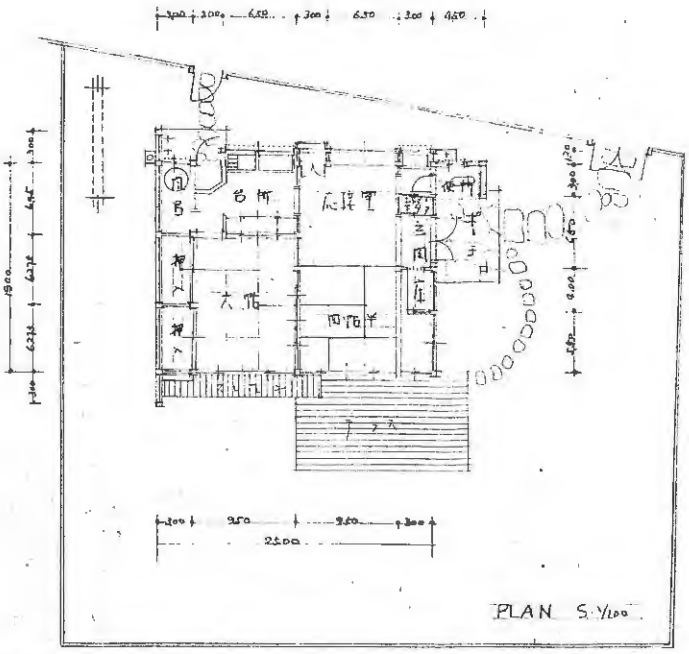
1950年は「広島の家」の活動の中で最も多くの住まいが建設された年であり，新しい試みも行われた。その一つがモデルハウスの建設である。前年の皆実町の平和住宅は市の設計した図面に基づいて建築したが，モデルハウスはワイ建築設計事務所のハリー・Ｙ・岡村氏が設計し，江波東町に建設された。建物の広さは14坪，４畳半のフローリングの応接室と４畳半と６畳の和室，台所，タイル張りのトイレ，浴室，ポーチやテラスも備えていた。

モデルハウスの建設の様子が撮影された写真も残っている。基礎となるレンガを積み，家の骨格を組み，屋根にセメント瓦を運び上げ，建具を取り付け，完成に近づいていく家づくりの一連の様子が伺える。

モデルハウス



19　東（玄関）側と南（庭）側から見た立面図



20　平面図

21　モデルハウス内部
＊応接室から四畳半の和室を写す

建設の様子

22　レンガで基礎をつくる

23　木材で家の骨格を組む

24　モデルハウスの骨格

25　作業現場での昼食

26　屋根に瓦を運ぶ

27　障子を張る

28　建具の取付け

29　完成したモデルハウス

完成後モデルハウスは7月30日から一般に公開され[73]，多くの人たちの関心を呼んだ。シュモー氏も，このモデルハウスについて報告書の中で次のように述べている。

HOUSES FOR HIROSHIMA

FRIENDS CENTER · 2959 - 15th NORTHWEST · SEATTLE 5, WASHINGTON

TERMINAL REPORT

30　1950年広島の家最終報告書

「異なる4民族，2宗教から9人のボランティアが広島で共に働き生活した。多くの作業員の助けを借り，家を失った家族のために，8棟の家を建設した。最も興味深かったプロジェクトは，小さいながらも立派な「モデルハウス」の建設で，最初に完成させ，市に寄贈した。このモデルハウスの一般公開期間中，何千もの人々が来訪し，口々に賞賛した。女性たちは毎日お客様にお茶を出してもてなした。このモデルハウスは日本全国のメディアに頻繁に取り上げられ，日本の建設省から感謝状と賞を贈られた[74]。」

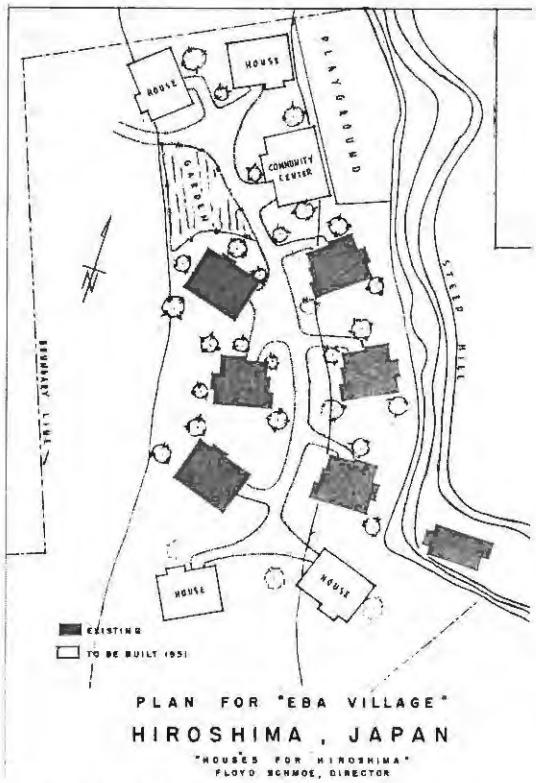
日本の住宅雑誌にも広島県建設課長の諫早信夫氏が比治山の原爆傷害調査委員会（ABCC）の建物や基町に建設される予定の児童図書館などと共にヒロシマの国際建築として皆実町の住宅とモデルハウスを「愛の家」として紹介している。その中では，モデルハウスを「小さい住宅ながらさまざまな工夫が施されている」と述べ，台所と6畳の和室の境に食器棚があり両方の部屋から使用できることやかまどが屋外に作られ室内が煙でくすぶらないようになっていること，トイレはモザイク・タイル張りで清潔で明るい点が評価されている。また，「建物の外壁や居間の壁がライトブルーであり，和風建築からは考えられない色だが，少しもおかしくない[75]」と記している。モデルハウスを撮影したカラー写真を見ると，確かに外壁が鮮やかなライトブルーであることが確認できる。家のつくりを評価するだけでなく，シュモー氏の支援が，市民の間に尊敬や親愛の情をもたらしたと伝えた。大きな反響があっ

たのは，支援の方法が大きな組織ではなく個人を主体として行っている点で，日本人の支援と大変異なっており，夏の暑い時期に広島で暮らしながら，自らが地元の人たちと協力しながら作業を進めていく姿に尊敬の念を抱いていたためと報告している[76]。

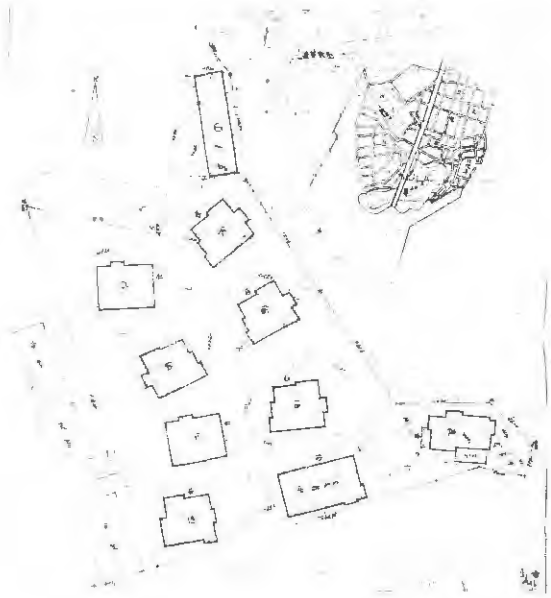
シュモー氏はモデルハウスを広島市へ寄贈する際，言葉や宗教の違いを超えて共に働き，助け合う良い「隣人」になることが，戦争を防ぐことができると述べ，この家に住む人，家を目にする人にとって，募金に応じ，家を建てた「広島の家」に関わったすべての人が友人であり「隣人」であり，この家が唯一目に見える友好の証であることを記憶にとどめておいてほしいと願った[77]。

2 “Eba Village”

1950年のもう一つの試みは，江波皿山の麓の南側の土地を購入し，家の建設を始めたことである。1950年から1952年にかけてここには，毎年家が建てられた。シュモー氏は，複数の住居を建てるだけでなく，集会所をつくり“Eba Village”と呼ぶ一つのコミュニティを作ろうと考えていた。シュモー氏が記した図面では，既に建築した住居とともに，これから建設を予定しているコミュニティハウス（図面上ではコミュニティセンター）と住居４棟が配置されている。実際は当初の配置とは異なり，コミュニティハウスを南側に建設し，Villageの一番北側には２家族が住むことができる二軒長屋１棟を建てることになる。



31　1950年の活動終了時の「広島の家」の配置図
＊網掛け部分が，既に建設した住宅



32　最終的な建物の配置図
＊図面中央の一番下の建物がコミュニティハウス

していた[80]。作業の様子を写した写真の中には，広島の家１，２には家を建てることにより，お互いを理解し合うこと，３には灯ろうに刻まれた「That There May Be Peace」，祈平和とシュモー氏が何度も手紙や報告書に記し，多くの人に伝えたスローガンが掲げられている。

37 「広島の家」のスローガンを掲げる
1951年

38 「広島の家」のスローガン
1951年

39 笑顔で力を合わせる
1951年

このスローガンのもと日本とアメリカの若い人たちが力を合わせ楽しく作業を進めていた。ジーン・ウォーキンショー（旧姓ストロング）氏は，大学を卒業したばかりの時に活動に参加。作業の様子を「初めのころは作業に苦労しました。特にのみを使った作業では，誤ってハンマーで自分の手を叩くことがよくありました。でもすぐに上達し，挑戦することを楽しみました。私たちは一緒に働くことを楽しみ，そして，たくさん笑いました[81]。」と述べている。

1951年は，これまで宿泊していた広島流川教会ではなく，“Eba Village” 内に住居があった女性ボランティアの家に女性たちは宿泊し，男性たちは夏の間留守宅となっていた前年に建設した住宅に滞在した。夏の時期で蒸し暑く，夕立も降り，夜寝る時には蚊やガを避けるために蚊帳を吊るなどしていた。食材は，果物や魚は近くの商店や市場で購入し，肉や卵，パンは少し離れた場所まで買いに行った。お米は農家からの配給だった。チーズは高く，マヨネーズはデパートから油を購入して作るしかなかった。バターは貴重だった[82]。

またウォーキンショー氏は，「冷静で，寛容な人々の様子に心を動かされました。食料不足，建物の破壊，輸送手段の欠如という状況に直面しながらも，人々が明るく朗らかなことが印象的でした。特に，一緒に作業をした日本人の女性たちの思いやりや優しさに感動しました。私が料理当番の日は，買い出しした物でよくみんなを驚かせました。日本語を話すことができず，私にはほとんどの食材が目新しいものであり，時に変わった組み合わせを買ってしまいました。みんなとても優しくて，私が出した料理が少し変わっていると思いながらも食べてくれました[83]。」と語っている。シュモー氏が考えたように家づくりを通して互いを理解し，友情が深まったのだった。

完成したコミュニティハウスは，シュモー氏が構想したようにホールを持ち，浴室を備えていた。

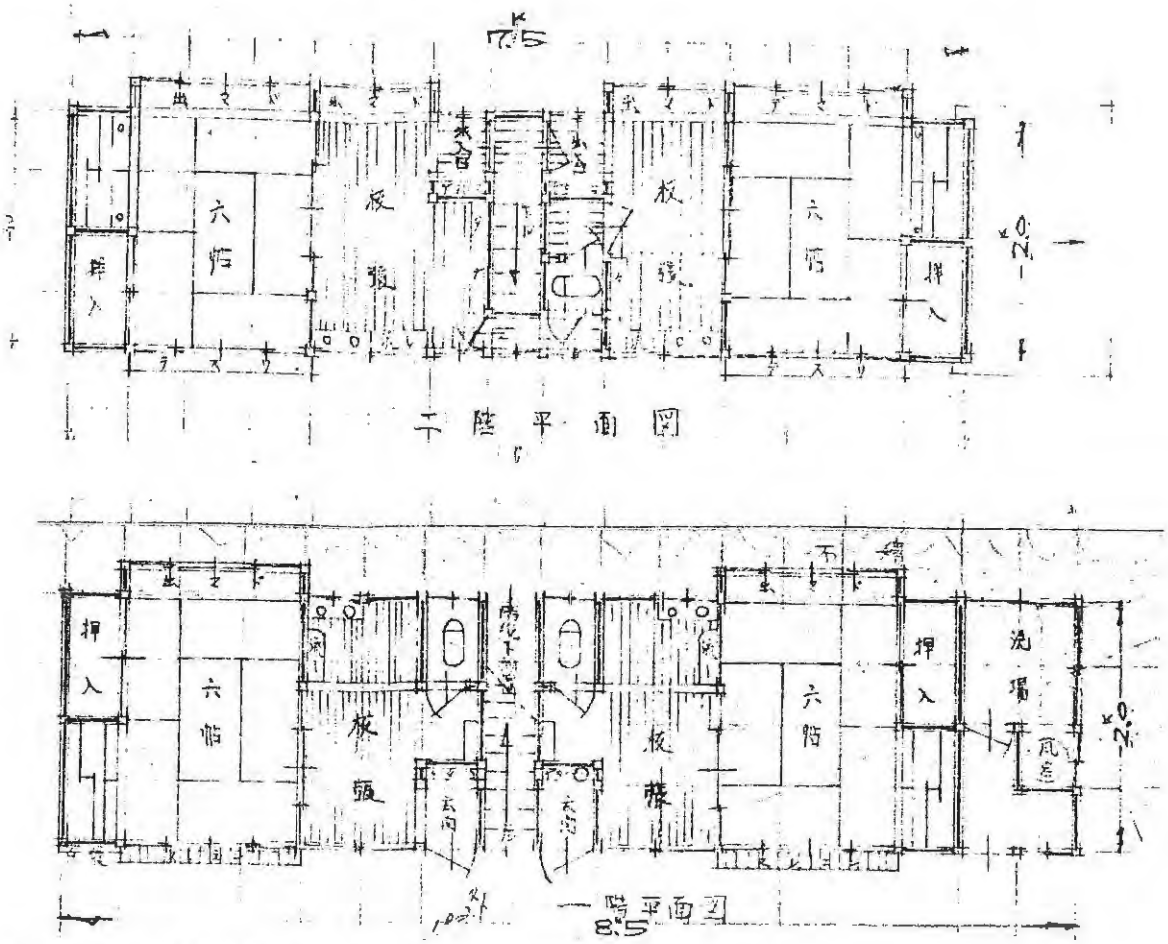
Ⅶ　支援の広がり

1　牛田での建設

1952年には，牛田で家づくりが始まった。広島市では以前と比べて土地の値段が高騰し，牛田の土地を27万5,000円（約750ドル）で購入した。この金額は，江波で土地を購入した時と比べて1坪につき4倍程度であった。シュモー氏が再び来日し，アメリカからのボランティア，東京からのボランティア，広島の地元の学生，1日単位でボランティア活動を行う人も加わった。

43　ゲストハウス（左）とアパート（右）

1952年には，2階建の建物がつくられた。4世帯が住むことができるアパートで6畳1間に台所，トイレが付き浴室は共同だった。家庭菜園を設けられるスペースもあった。1953年度には，アパートの隣にゲストハウスが建てられた。当初，広島を訪れた外国人が利用できることを考えていた。ゲストハウスを利用することによって支援活動を行う人は家族で来日し，長く滞在することができる。さらに周りの日本人家族と交流することで理解や善意が生まれることを期待した。もちろん，支援活動のためではなく広島を訪れた人々も利用できる[86]。またこの場所は，広島市の水道管から少し離れていたため，「広島の家」の費用で市が住宅まで水道を供給できる設備を整えている[87]。



44　アパートの1階，2階平面図

Ⅷ　活動の終わりと新たな支援へ

「広島の家」の活動により，広島に建設された住宅は表のように15棟（21戸）を数えた。活動が始まった1949年から1952年まで世界中の人たちから約３万ドルを超える寄付が集まり，アメリカから日本へ17人のボランティアが赴いた。またこの活動をきっかけに８人の日本人がアメリカへ留学した[90]。

50 「広島の家」の建設状況

建設年度	建設場所（現在の町名）	建物数(棟)	戸数(戸)	建設時の用途
1949	皆実町一丁目	2	4	原爆罹災者のための住宅
1950	江波東町一丁目	1	1	原爆罹災者のための住宅（モデルハウス）
	江波二本松一丁目	7	7	原爆罹災者のための住宅
1951	江波二本松一丁目	1	1	原爆罹災者のための住宅
		1	1	コミュニティハウス（現在のシュモーハウス）
1952	江波二本松一丁目	1	2	原爆罹災者のための住宅
	牛田東二丁目	1	4	原爆罹災者のための住宅
1953	牛田東二丁目	1	1	ゲストハウス
計		15	21	

1953年をもって「広島の家」の活動は終了する。この年の市勢要覧では，広島市の住戸数は７万3,000戸を数え，５年間で約２万戸の住戸が新築されたと報告されている[91]。「広島の家」もその中に含まれていた。しかし，活動が終了したのは，広島の住宅不足が解決したためではない。1950年に勃発した朝鮮戦争により悲惨な状態となった韓国での支援活動に新たに従事するためであった[92]。シュモー氏は国連の韓国復興機関の支援や個人からの寄付を受け「韓国の家」の活動を始めた。1953年から1956年（昭和31年）まで戦闘で多くの住宅が破壊された地域の人々に住宅をつくり，井戸を掘り，道路を修理した。診療所もつくった[93]。さらに戦争で傷ついた人々へのシュモー氏の支援活動は続く。1956年に第二次中東戦争が起こると，空襲によって街を破壊され住まいを失った4,000の家族を救援するためにエジプトに赴いた。被害を受けた人々が移住先で暮らすことができるよう，戦争によって埋められていた井戸を掘り，水を汲み出すポンプを購入した。シュモー氏たちが掘った井戸から水を引き，柑橘類やナツメヤシ，オリーブなどが植えられ，多くの家族がそこに住んだ[94]。

エジプトでの活動を終え，シュモー氏は引退したと語る[95]。第二次世界大戦中の日系アメリカ人への支援から始まり，広島・長崎，韓国，エジプトまで休む間もなく，戦争で被害を受けた人たちに思いを寄せ自ら現地へ赴き汗を流し続けた十数年であった。

しかし，シュモー氏の情熱は衰えなかった。90歳を超えてウズベキスタンの首都タシケントや住まいのあったアメリカ・シアトルに平和公園をつくった。シアトルの平和公園には広島で被爆し，９年後に白血病を発症し亡くなった佐々木禎子さんの銅像が設置されている[96]。

理念を今一度思い返したい。平和をつくりだすのは，私たち一人一人の役割であり，互いを尊重し理解する心なのだと。

当時の貴重な資料を提供していただいた「広島の家」の活動に参加された方々，そのご家族，現在にシュモー氏たちの想いを伝え続ける方々，「広島の家」に関わる全ての人に感謝申し上げたい。

1 長谷川寿美「フロイド・シュモーと「広島の家」」『エスニックアメリカを問う「多からなる一つ」への多角的アプローチ』彩流社　2015年
2 シュモーに学ぶ会『ヒロシマの家ーフロイド・シュモーと仲間たちー』2014年
3 Letter from Floyd Schmoe, Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
4 ヒラサキ・ナショナル・リソースセンター『日系アメリカ人強制収容所の概要』
全米日系人博物館ウェブサイト〈http://www.janm.org/jpn/nrc_jp/accmass_jp.html〉
5 デイジー・ティブズ氏の証言　2012年　シュモーハウス展示「広島の家」の建設に参加した人たち
6 Floyd Schmoe, "A HOUSE FOR HIROSHIMA," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder1.
7 Floyd Schmoe, "A HOUSE FOR HIROSHIMA," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder1.
8 Floyd Schmoe, "A HOUSE FOR HIROSHIMA," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder1.
9 "HOUSE FOR HIROSHIMA ... A Quaker concern in action," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder1.
10 Letter from Floyd Schmoe to Ruth Jenkins, January 9, 1949, Emery E. Andrews papers, 1925-1959, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.1908-001, Box1, Folder15.
11 Floyd Schmoe, "A HOUSE FOR HIROSHIMA," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder1.
12 全国福祉協議会『ララ記念誌』1996年　92-94頁
13 竹前栄治・中村隆英監修　菅沼　隆解説・訳『GHQ日本占領史　第23巻　社会福祉』日本図書センター　1998年　115-118頁
14 全国福祉協議会『ララ記念誌』1996年　261頁
15 Floyd Schmoe, "A HOUSE FOR HIROSHIMA," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder1.
16 Ferner Nuhn, "HE WANTED TO BUILD HOUSES FOR HIROSHIMA," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box13, Folder1.
この資料によれば，シュモー氏は，250頭ものヤギを日本へ連れて来たと記されている。
17 竹前栄治・中村隆英監修　菅沼　隆解説・訳『GHQ日本占領史　第23巻　社会福祉』日本図書センター　1998年　118頁
18 Letter from Floyd Schmoe to Emery Andrews, January 24, 1949, Emery E. Andrews papers, 1925-1959, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.1908-001, Box1, Folder15.
19 Alice Franklin Bryant, "A HOUSE FOR HIROSHIMA," May 20, 1951, Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box13, Folder9.
20 広島市『市勢要覧（復興第一年号）昭和二十一年版』1947年　57頁－58頁
21 広島市編『広島新史　市民生活編』1983年　56頁
22 広島市編『広島新史　市民生活編』1983年　60頁
23 Letter from Floyd Schmoe to Ruth Jenkins, January 9, 1949, Emery E. Andrews papers, 1925-1959, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.1908-001, Box1, Folder15.
24 "FOR THE HOUSE FOR HIROSHIMA," Emery E. Andrews papers, 1925-1959, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.1908-001, Box4 Folder8.
25 Floyd Schmoe interview, 1989, Collection of American Friends Service Commitee.
26 Letter from Floyd Schmoe to Miss Thompson, September 14, 1949, Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The

63 "Emery E. Andrews Diary" ブルックス・アンドリュース氏寄贈　広島平和記念資料館所蔵
64 広島市衛生局原爆被害対策部『広島市原爆被爆者援護行政史』1996年　56頁
65 広島市『市勢要覧　昭和26年版（1951）』1952年　7頁
66 "Emery E. Andrews Diary" ブルックス・アンドリュース氏寄贈　広島平和記念資料館所蔵
67 Letter from Floyd Schmoe to friends, January 1, 1950, Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
68 HOUSES FOR HIROSHIMA Report from Floyd Schmoe to friends, March 1950, Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
69 『朝日新聞』1950年6月18日，19日
70 『毎日新聞』1950年6月19日
71 Letter from Floyd Schmoe to Emery Andrews, June 26, 1950, Emery E. Andrews papers, 1925-1959, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.1908-001, Box4, Folder12.
72 Letter from Tomiko Yamazaki to Emery Andrews, June 26, 1950, Emery E. Andrews papers, 1925-1959, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.1908-001, Box4, Folder12.
73 『中国新聞』1950年7月31日
74 Floyd Schmoe, "TERMINAL REPORT 1950," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
75 諫早信夫「ヒロシマの国際建築」『新住宅・昭和25年9～10月号（通巻第41号）』新住宅社　1950年　48頁－49頁
76 諫早信夫「ヒロシマの国際建築」『新住宅・昭和25年9～10月号（通巻第41号）』新住宅社　1950年　48頁－49頁
77 Floyd Schmoe, "Remarks at the presentation of a "model house" to the City of Hiroshima," August 4, 1950, Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder30.
78 Floyd Schmoe, "TERMINAL REPORT 1950," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
79 HOUSES FOR HIROSHIMA Report from Floyd Schmoe to friednds, Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
80 "*THE SEATTLE TIMES*," Sunday, November 25, 1951, Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box13, Folder9.
81 ジーン・ウォーキンショー氏の証言　2012年　シュモーハウス展示「広島の家」の建設に参加した人たち
82 "The report from Jean Walkinshaw to everyone" ジーン・ウォーキンショー氏寄贈　広島平和記念資料館所蔵
83 ジーン・ウォーキンショー氏の証言　2012年　シュモーハウス展示「広島の家」の建設に参加した人たち
84 Floyd Schmoe, "TERMINAL REPORT 1951 SEASON," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
85 Letter from unknown, August 5, 1951, Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
86 Floyd Schmoe, "PROGRESS REPORT NOVEMBER 1952," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
87 Letter from Shinzo Hamai to Floyd Schmoe, February 26, 1953, Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder4.
88 Floyd Schmoe, "TERMINAL REPORT 1950," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
89 Floyd Schmoe, "PROGRESS REPORT NOVEMBER 1952," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
90 Floyd Schmoe, "PROGRESS REPORT NOVEMBER 1952," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
91 広島市『市勢要覧　昭和28年版』1954年　31頁
92 Floyd Schmoe, "PROGRESS REPORT NOVEMBER 1952," Floyd W. Schmoe Papers, 1903-1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496-008, Box12, Folder16.
93 Kit Oldham, "Schmoe, Floyd W. (1895-2001)," History Link.org Essay 3876. <http://www.historylink.org/File/3876>
94 Transcript of Kitty Barragato, Interview of Floyd Schmoe "Oral History Interview # 21," February 25, 1989, Collection of American Friends Service Commitee.

ひろしま復興・平和構築研究事業報告書

広島の復興経験を生かすために－廃墟からの再生－　第４巻

発　行　日：平成30年３月31日

編集・発行：**国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会**（広島県・広島市）

【事務局】広島県地域政策局平和推進プロジェクト・チーム

〒730-8511　広島市中区基町10-52